所我が為人に法　仰ぎ信じ市津屋に場所を設け先達を
相撲に興行し里村忠命大夫村我おと二分これを村方扱を
仰ぎ我が事を元に為知り事にこれ言ふ旨先輩に
扱方を曲人と渡る文小遍と仰ぎ相撲に仕度に
事を面宮氏部書に相撲に取り及び月半逗留
紙対法にて上令一見に参る中に面白き良法も有
仍ても遠に黄色に成る我より方に相撲に事に同
我が扱方に事に方に小者ふ迄山を少
以て可法に是又先年に慶に重き　即逗留に月
ふ仰も仰命に及人参ふ扱上随に事

令世法可法に扱所陣屋に紙渡可申達事

五月

端午の事　八幡
五判

奥州平泉関山中に記称〜平泉関山中に寺
に弘法兼院と号　陳厳山　即法寺　南山の地界に先東に大河流に
岡山の新遠山を浸〜而に有る山御ことして遥に
駒ヶ嶽迄〜月山又に蓮華地に蓮と古に鶴ヶ
岡陸ヶ嶽松和尚と法に毛御寺逆谷に傳に
泉ヶ嶽奥州の名所夜川と申に〜に四神に庭北
霊場に〜に少人皇に拾四代の帝

仁明天皇の御宇和銅之庚午年慈覚大師の開基
なり陽地と云ふ山地也本尊観世音と一山の護持と
勅願寺なり法華堂は建立法華の霊像と
安置せりと云ふ伝なり大師護持
の天竺人小八唐筆の天台大師の絵像今小残せり
地い行布と云ふ是正しき天竺より渡り山に仏像奥の大唐法華府
将軍義康法華勅願寺慈覚大師建立と建
立せりと也渡船と尋ねるに法華勅願寺の家小
宗長と云ふ人ふるくに三寅と敬ひ天長地久の法
華経無量の行願深く切なるゆへに慈覚大師

第創の以ふしへと思ひなとも備(接)仏閣備ぶせさる
事を歎き堂塔数十宇を造立し先法華勅願寺創
のもしへ九重の石塔小なる迄三千
余日の行程之地の道を所三ヶ所そなわると云ふ
西上令寺の阿弥陀乃像を安置せり是往還の旅人を信仰の栄
ひとしく陽縁をひとしもしへんの西光寺又南寺いたの
中央なる少へ小名を中寺と号ス山の頂小かしく長
治二乙酉年まで宮地院なりて山上山下と云ふ
小さ山と称ス地形をまし池を穿ち水脈を通ス
第木樹林の行とをなし堂塔四十余宇禅坊三百余

宇を建立し（源氏物語をさすか）武い反橋斜橋大門僧房書塔
塔金堂内院如幻のまうゝ形をはたらく孫麗をかゝ（金銀螺
細をちりばめ錦ことゝして色光まに相映し又宮殿樓閣
より中門小房樂の音詳を奏し（右田三千坊の求三千人と九田米
法師又い衆人の行指示を）大元
寺小小流れ佛宗を崇ち法人
門を開し之宝恭敬の色をなさし光明内佛ちい
つゝ奉し藥小関門有名名ゝ夜ら関と云（故小山ちをの関山と云いい）
名も逐谷関のとゝしたる山右い長延をう（り名
東小流ゝ衣川俗川小れ是し俗山い東稲山小ち
積き華本のうゝい書ゝ小弥宮のとゝし西ゝの方

陸奥のたゝし孫山のさゝゝ光高明ゝ初小ゝ名ゝ
又震旦小天台山書龍寺白ゝ寺の天宝寺求ゝれ
さゝんら既吾郷小ゝて東大寺興福寺延暦寺園城
寺の諸寺小ゝ名ゝ近年ゝ宝賊と遂ゝ多信を傳記
ゝ大舎と称ゝり紀ゝ小教寺寺遥小人皇七十六代
の帝　堀川院同七十代帝　鳥羽院の歳雅小遥
ゝ歳感ゝ名ゝ小ゝ法則法護国家の霊場ゝ小ゝ
ゝとて勅宣とゝ下ゝのゝ天治之丙午年月
廿四支干ゝ寺の古殿ゝ光小ゝ光ゝ勅使として
検察使中納言藤原隆信下向ゝの大伽藍書塔を

所領を没収し則所領を納し玉滝小巍に蒲
生氏郷を論じ給ふ云々右所領文書等
右書たる文書紛失の
是ハ天正の冷泉中納言殿合戦
書ハ正の事なり
長源文治五年源頼朝伊豆蒲
兵乱を鎮ずる後諸寺領に二所
所領の内藤原陣の号小系して清澄山源氏の造立
書社の事一説も 鳥羽皇帝の御所の事をとれひ
皇を法皇ならんい所領急信ハと信さも事ハ
を清澄の内相頼守満の市内藤料所と奉り並の
うついの白浪又五郎ありしなるのよし清義書と
ハ一つのよし

寺院社領小さき小ハ清澄寺ハ窓井川西ハ山を岩谷小ハ峯山の未又ハ
紙屋小者坂白浜西坂洲 小牧ハ村や或ハ古文ハ小ハ北除右横ハ貝時北島中
納言源家清澄寺潮正少弼長政関白
秀次ハ古文ハ

去りしかも鎌倉将軍家ハ出ハ根藤孔ハ寺
屋ハ三ハ右四命小川ハ書陽社退相ハ
の加ハ屋移りて広尾宮殿の蔵も朽損し八幡天
主の蔵も劫火ハ焼のうれひとや皆時刻
南朱氏ハ氏ハ紀小建武四年野火急小ハ
蔵ハ三ハ右に所元代の建立蔵ハ
慶長ハ三ハ右に所元代の建立蔵ハ
楼閣柱石は操又ハ累世ハ
ハ代の所庫門牆に到ハ近四孫小ハ

鎌倉に灰燼となりぬ毎日〳〵弥ゝ衰へ今日に至りて
一山僧院十八所書に八種の種絵今悉皆なり其の佛像に
も殊勝なりかゝる仏法の逆流なる世相と歎
国家の衰亡をかなしむ僧官をなし又は僧徒微少の
力を励し絶えんとする仏法を興し廃れんとする仏を興し礎石の
四法に小社供養数字と遠き今に残て其神其
佛を安置し古法の復興勤行怠慢なく能中
毎年二月初午の神事は一山の僧徒祭を抽し
白山宮の神輿を初め奉り天下泰平国家安穏の
祈禱同日市下馬 毛南社僧侶向の規式 石宮ふしして山の神秘 次に田楽 古代より奏し僧徒神恵

を奏す次に闘鶏 花園義女光女 三番とも何れも古風なり
祇園社の神輿を次に能の無行なり四月末の日は一山中の堂社を
回り山王文殊師堂の山王田楽と共に法華社の神輿を文殊と共に
白山宮の神輿出て前年と又は祈雨祭なり則
一山の分らぬ者の社神輿に同輿の規式備儀を初め下馬
ものなり 新宮文殊むらくと共に八王子の社の三殿なり
新記寂寞なれて文を加へ仏教なりとも来歴又は古儀
の文と思ふい牛毛の一をきりたもらぬ
なるとなり奥の中所奥の中殿と
所々の由緒有るとなり
今考へる所

中堂の年終

天保四巳年二月